

赤坂 志乃

日本の抽象絵画の先駆者であり、世界的に知られる前衛グループ「具体美術協会（具体）」のリーダー、吉原治良（1905〜72年）の珍しい壁画が、半世紀前に建てられた「西長堀アパート」（大阪市西区、現・西長堀団地）に残っていることが先月23日付夕刊（大阪本社版）で伝えられた。

この壁画がいかにも価値あるものなのを書いてみたい。「具体」が結成されて4年目の1958年、吉原53歳の時の作品である。この年、初の1万円札発行、東京タワーの完成と、戦後日本が大きく飛躍しようとしていた。

西長堀アパートは、草創期の日本住宅公団（現・UR都市機構）が建設した、関西で初めてのデラックスな11階建て高層住宅。「現代美術」を取り入れた斬新な住み方は評判を呼んだ。パンフレットには、吉原が色紙を裂いて張り付けた原画（現在不明）がそのままデザインされている。

マンモスアパートの玄関ホールで壁画は新しい時代の風を吹かせていただろう。いつ頃からかホールはパネルで仕切られ、今は談話室となった壁に銅網そうじに納まっている。大きさは、縦2.43×横3.84。色の異なる大理石を組み合わせた、抽象のモ

吉原治良の壁画、半世紀前のアパートに現存

公共美術の熱い時代伝える

ザイク壁画である。スタイルは吉原の練の抽象の時代を思わせるもの。石を用いながら、原画の紙をちぎった時に偶然できる質感や伸びやかさを感じられておもしろい。

壁面の依頼があった1958年7月頃、吉原はニューヨーク

ークをはじめ全米各地で「具体美術展」を開くため、アメリカへ行く準備に追われていた。「精神が自由である証しを具体的に提示しよう」というスローガンのもと、「具体」は型破りな野外展や舞台展を行い、美術界にセンセーシヨ

ンを巻き起こしていた。自由奔放なパフォーマンスは批判や無理解にさらされたが、57年にアンフォルメル（非定型派）を先導するフランスの評論家ミシェル・タビエが高く評価、念願の海外進出を果たすことになっていた時期だ。

ス、ポルトガル、ベルギー産など世界中から集めた大理石と日本の御影石を使用。原画のどの部分にどの石を使うか、サインの位置はどこが良いかなど、アメリカにいらる吉原と手紙で確認しながら壁画を完成させていたことが、大阪大学大学院生の鈴木慈子さ



現在の吉原治良さんの壁画（写真上）と、当時のパンフレットに掲載された原画（同下）



は9月の渡米までに壁画の原画を制作し、具体メンバーの白髪一雄と吉田稔郎に細かい指針を与え、画家で石材業者の矢橋六郎が制作にあたって

の最近の調査でわかってきた。西長堀アパートが竣工し、お披露目が行われていたちょうどその頃、ニューヨークのマーサ・ジャクソン画廊で、海外初の「具体美術展」が開催されていたことになる。

壁画の完成後、吉原は、「一切の具象的な意味が入り込まないたたの石の壁であり、しかも見あきたら、魅力ある平面にしようと思った」と、さらりと語っている（「建築と社会」1959年4月）。建築空間と壁画の調和について、「偶然の出会いといいますが、壁面の前に人が立つてもいい、植木鉢や家具が置かれてもいい、思いがけない美しさが感じられることがあり」とも。パブリックアートという言葉はなかったが、建築美術は人が活用してこそ生きると、吉原は考えていたのだと。

あまりに空間となじんでいたのか、壁画は仕切り壁の奥で長い間存在する忘れられていた時期がある。調査を元にして出した元具体メンバーで造形作家の今井祝雄さんは、「関西に現存するパブリックアートの先駆けといえるものにかかわらず大切にされてこなかったため失われたものも多い」と、作品の行く未を案じる。

旧東京都庁の岡本太郎の壁画をはじめ、50年代から60年代にかけて各地の公共施設に美術家の壁画が取り入れられたが、現存するものは少ないという。躍動する戦後美術の1シーン伝える、マンモスアパートの吉原の壁画。あらためてその価値を見直した